

幕末期宇和島藩の動向(9)

—— 伊達宗城を中心に ——

三 好 昌 文

前号 (第12巻 第1号)

3 万延元年桜田門外の変～慶応3年王政復古

A) 公武合体運動の展開

ア) 宗城の帰国と宇和島藩政

イ) 岩瀬忠震と宗城

ウ) 在国中の宗城

エ) 公武合体運動への参加

オ) 宗城第一回目の上京

本号

B) 攘夷の実行～第一次幕長戦争

ア) 宗城第二回目の上京と参預会議

文久3年帰国中の宗城と情勢

外交問題の概要

参預会議

B) 攘夷の実行～第一次幕長戦争

ア) 宗城第二回目の上京と参預会議

文久3年帰国中の宗城と情勢

宗城の第一回目の上京における藩兵の動員

数等について記録は現存しないようである。

ただ一つ、「文久二戌冬 大屋形様御上京并御下向之節迄御入高大匁」という史料がある¹⁾。その内容を見ると、上京のための経費は金1,779両3分2朱、銭359貫210文(金59両余)、銀20貫548匁3分1厘(金266両3分1朱)、銀札1

貫700目6分3厘(金14両2分余),小計金2,002両余,滞京中が金453両2分2朱,銀348匁(金4両2分余),黄金18枚(金699両1分2朱),銭196貫716文(金32両1分1朱余),銀札128匁2分8厘(金1両1朱余),小計1,190両1分2朱(ただし滞京中の大坂蔵屋敷における支出分は含まず),下向は金360両3分3朱,銭122貫984文(金20両3朱余),銀札1貫119匁9分4厘(金9両2分余),小計390両2分2朱,総計は金3,701両2分3朱とされている(徳久忠介の計算)。

以上の出費は、宇和島藩の財政にとって大きな負担となったといえる。安政2年正月14日の御金方における前年度決算の繰越金は、黄金3枚,金4,156両,銀83貫306匁7分余,銀札242貫434匁5分余であるから²⁾上京については上方における借金を免れることはできなかったと思われる。したがって、宇和島藩は物産方役所における殖産興業を推進したと考えられるが、それを計量・金額で明らかにすることはできない。

文久3年6月2日、城内の三ノ丸御殿を廃棄し練兵場とし、日振新田の内百坪を引き上げて、威遠流指南方に一任し、銀札5貫114匁の予算で砲台を築くこととした³⁾これが恵美須山砲台となる。同月7日、前日沖之島番人が5月晦日に外国大船1隻が運航した(船籍不明)ことをうけて、翌7日、「外国船漂流御手当」を改訂した⁴⁾16日、保井組雨井浦船頭宇之助が、長州藩砲台が外国船を砲撃したのを実見したと報告した⁵⁾5月10日、下関での米商船、23日の仏艦、26日の蘭艦に対する砲撃のいずれかであろう。宇和島藩ではその報復攻撃があると考え、御庄口・上灘口の防備の強化に努めた。「其地方農民人気が奮立居リシモ、鉄砲少ク軍器ナク」という状態で、藩は御庄組代官の申し出に応じ、「筒一挺ニ付四匁玉拾発分、合薬式匁込同断、火縄式繰ツゝ三百挺分」を下賜した。古式の火縄銃である。17日、京都に馬二匹・野戦銃を送っているところを見ると、京都にはまだ藩兵が残留していたことになる⁶⁾またこの日、農民20人を選んでよりの砲台付きの煩手としている。非常出張の節、先後隊兵卒8組について、ゲベール銃の弾薬は1人につき合薬(1放2匁)、鉛(1放7匁7分)、

200 発管(100 放につき 30 増), およびこれに見合うバトロン用紙, 1 組につき大鼓 1 つ, さらに他に予備として 1 組に鉛 8 貫 400 目, 合薬 2 貫目, 管(雷管) 1,300, これに見合うバトロン用紙と 1 挺につき管座 1 つ宛を渡すことを定めた。

22 日, 藩主宗徳に来年正月から 3 月の京都警衛のための上京が命ぜられた。28 日, 宗城は今泉造酒右衛門に自書をもって, 「其方預組之者多分小隊打出来, 実戦之備相立」と, 銃卒ともに精励を賞している⁷⁾。洋式軍制がようやく実用段階に到達したのである。

帰藩後, 宗城と山内容堂の間には頻繁に情報の交換があった⁸⁾。6 月 22 日付容堂書翰には, 「中川宮 (○朝彦親王) と極内々被仰下候事御座候, 実重大之事, 其上乍恐御同意も容易に難仕, 苦心之至候」として, 京都・関東の情勢を「時勢大變, 如風中之雲霧」として宗城に伝えた。(1) 將軍の帰府 (6 月 13 日大坂出航) 後, 横浜で「外夷拒絶」の交渉をしなかったら違勅になる (6 月 1 日米軍艦が長州藩砲台を攻撃, 6 月 10 日仏英米蘭 4 国代表が長州藩攻撃を決議。これらは後述する)。(2) 老中格小笠原^{ながみち}函書頭長行 (唐津藩主世子) の免職 (6 月 9 日。兵 2,000 人を率いて大坂に行き, 上京しようとして將軍が阻止) のこと。(3) 幕府が兵 2 万人を上京させようという風評 (尊攘派制圧のため)。將軍帰府のため途中で引き返したともいい, 容堂は「関東失策」と評価する。(4) 姉小路公知暗殺 (5 月 20 日) の下手人として薩摩藩士田中新兵衛を逮捕 (自殺) した件。このため, 朝廷は薩摩藩士の「六門内往来」を禁止し, 薩摩藩も「内実ハ大不平と察候」。高崎佐太郎のみが滞京し, 他は帰国した。(5) 「長州, 仏ニ被打破, 軍艦式艘沈没」, 攘夷の実行は長州藩のみで近隣の諸藩は傍観したため, 久坂元瑞が上京して勅書を受け取り布告した。「此事皇国之安危ニ係候義, 雖 勅書容易ニ御受ハ出来難く」, 藩主豊範から上書させる。「皇国一体」でなくては西欧大国に対応できない。(6) 「貴境海防御充実と奉羨候」, 土佐藩は手薄である。(7) 「已後弥攘夷之手段」は隣接との応援がなくてはならぬから, 近く家臣を宇和島へ派遣する。(8) 「元瑞其外長藩暴論之徒 (○尊攘激派) 幾名有之候哉」, 承知なら

教えて欲しい。(9)長州藩砲台の藩兵は「孰も生色無之^(ママ) 赴」,「外夷悉ク輻湊, 半年之所も支候や, 長之暴ハ暴ニ而, 致方無之候得共, 亦均ク 皇国ニ御座候」と, 長州藩に対する諸外国の攻撃は日本全体の問題とする。これは宗城も同じ認識であろう。

25日付返翰では、「御互ニ帰郷後ハ 京之形勢又々変化甚^(しく) 布, 歎息之至不過之候」と述べ, 事態打開の方策もないから, 帰郷してよかったという。先述の中川宮の密諭とは、「此節外患よりハ内憂の御心痛之趣」とされ, 事態によっては上京せよとの命で, 容堂は「此事閉口恐入申候」と, 公武合体派の解体, 尊攘派の専横のなかで, 事態静観の姿勢を明らかにしている。姉小路暗殺について, 薩摩藩と中川宮が疑惑の対象となっているが, 容堂はこれを否定する。「下関暴発」, 開戦について, 中山忠能・久坂玄瑞も出張し, 藩主父子も出馬の風評を得て, 家臣を探索に行かせるという。「弊藩因循云々ハ御推量之通」とし, 尊攘運動には加担しない。宇和島藩は親兵を派遣したというが, 自藩は出していないという。この書翰には「昨夜京師^と急報, 朝議紛乱, 大樹公御下坂, 一橋会津俄ニ東下」との朱書が付けられていた。

7月2日, 宗城は朝廷からの「外国拒絶期限」に関し, 長州藩のみが攘夷を実行したが, 他も傍観せず応援掃攘せよとの達を頒布した⁹⁾。この日, 御庄台場砲術頭取吉見長左衛門が出張の大頭に任せられ, 後任は桜田大炊となった。翌7日, 先発の河原治左衛門に続き, 小梁川主膳が京都守衛撰士隊長を命ぜられ, 鹿野久兵衛弟瀧次郎・萩森巖助・田中六左衛門および軽卒5人に1年間の京都詰が命ぜられた。京都の屋敷は寺院, 隊長の役職は若年寄とされ, 飛脚(情報)を用向き・見聞次第知らせることとされている。この藩兵上京は, 12月上旬に宗城の上京が予定されていたことに関係している。

7月4日, 外海浦庄屋信治(二宮如水の子)より御庄組代官西河喜久之助宛に, 大風浪のなか福浦の沖合3, 4町に, 長さ4, 50間・二本柱, 中央に煙突があり, 乗員20人程, 黒人も5人ほどいると報告した。大砲・端艇4も持つ蒸気船であった。西河は御庄組の猟師を深浦に出張させたがすでに出航してい

た¹⁰⁾どこの国の軍艦かは不明であり、藩もこのような場合薪水を給与せよと命じているのみである。

7月15日、鳥取藩主池田慶徳より6月5日付の宗城宛書翰が届いた。¹¹⁾「近時京江（○京都・江戸）之事情愈切迫之形勢ニ而，（○中略）先頃唐津（○小笠原長行）東行以来，水戸中納言（○徳川慶篤）下向後，東武之次第散々之事共ニ而，遂ニ償金（○生麦事件）も被相渡候趣，（○中略）更ニ幕政府之定見も無之」と幕閣を中心とした政権内の不統一を伝えている。

7月13日付宗城宛容堂返翰には¹²⁾(1)「神京之形勢又々大一変之兆も有之候哉ニも承」と伝え、中川宮を中心に「三条家始長州へ雷同之徒皆々落職哉，御咎等ニ可及欵」としながら、「僕は更ニ信不申候」と述べている。京都の一部に八月十八日の政変を思わせるような情報が流れていたのであろうか。(2)将軍家茂は6月13日大坂を出帆，16日江戸着。(3)小笠原長行の動向は「何分確説不分明ニ御座候」。これは小笠原の率兵上京の失敗，独断償金支払の件などの事後処理をさしているのであろう。(4)「弊藩暴勤王之徒三名切腹」，これは6月8日，土佐勤王党の平井収次郎ら3人に切腹を命じたことをさす。容堂は藩内の意志統一に努めたが，長州藩の攘夷実行と同時に，その使者大和弥八郎らが高知に来て，勤王党に協力を求め，武市瑞山は容堂の因循論に反発していた。(5)「姉小路一件」，これは下手人の問題と同時に，小笠原長行との関係，大坂湾を巡見して勝海舟に開国説を説得されたなど，さまざまな波乱を含んでいた。(6)宇和島藩士を高知へ派遣する件。容堂は「勿論御互ニ旧来如兄弟義故，家来も亦親布交候」と歓迎し，海防論の要件であった。(7)「横浜拒絶」に及べば，長州攻撃が当冬か明年早春にもあるであろう。さらに別書（7月2日付）で，(1)長州人3人程が武市半平太を訪問に来た。その主意は「姉小路横死ハ薩摩之所為故，薩ヲカタキと見付可滅，又関東之因循をも可責，外夷も可攘，左候時ハ五大洲も敵，日本中も皆敵と成候故，頼ハ貴藩」として土佐藩尊攘派の決起を促すことにあつた。益田弾正(右衛門介，萩藩家老，7月に上京して攘夷親征を建議)を上京させ攘夷を周旋させるという。容堂は薩摩対長州の戦いになるとし，薩

摩藩の「兵備之充実も同日之論ニ非ス」として、薩摩の優勢と考えている。(2)横浜で初めて火輪船を購入、中浜万次郎を船中惣督として来月中旬には高知に着く。このような船は幕府にもまだないと自慢している(南海丸か、同年4月購入、100トン)。(3)長州藩の外国船攻撃は同藩の安危にかかわり、「何分名正カラス、唯打払を而已武威之様ニ心得」、かえって日本を危うくする。(4)薩摩藩の海防の様子を知らせて欲しい。(5)幕府は攘夷はできないが、朝廷に対してそうは言えず、「御不都合千万、足下如何」。(6)正親町三条(公董^{きんただ})が攘夷監察使に任ぜられて長州に行った(攘夷実行嘉賞の勅諭を伝達)。(7)長州藩主父子は山口に要害(政事堂)を建てた。以上を見ても、宗城と容堂との情報交換によって、国内外の情勢は的確に把握されていたといえる。

7月22日付容堂返翰では¹³⁾長州藩の使者が阿波を経て土佐にも来たので、宇和島藩にも行くであろう。これは「合点不参候、拙家ハ毛利家とハ大ニ相違、朝敵之名明白ニ無之内ハ、徳川家ニ背候義萬不可然」、毛利家は関ヶ原の役後領地を削減され、恨みがあるかも知れないが、山内家は6万石から20万石になったのは徳川の恩であると強調している。この観点からいえば、宇和島藩も全く同様である。また、過日松平春嶽から書状が届いて驚いた。「御互ニ如兄弟交り候者故、其罪(○政事総裁職の辞職の許可なく福井に帰国し、免職・謹慎の処分を受けたこと)之軽重ハ姑^(しばらく)置之、御免蒙候義」は私情において安心とする。

8月2日、宗城は「軍務専一」として、後隊大頭神尾帯刀を老職兼務、前隊大頭桜田大炊を政事見習兼務とし、志賀頼母を老職・武術頭取、清水真一(飛驒)を若年寄、上甲貞一を奥儒者とした¹⁴⁾6日、長州藩から御側使者が来て、攘夷の実行についての協力を求めた。宗城は「皇国維持ハ闔国一致、外ナシ、外国ノ所置ハ征夷府へ御委任ナレハ、其令ニ依テ所置スベシ、若襲来ラバカノ限り掃攘ノ外ハ弊藩微力ノ及ブ所ニ非ズ」と回答している。容堂の見解と同一である。8月2日付容堂書翰では¹⁵⁾薩英戦争の勃発(7月2日)についてすでに情報交換があったが、容堂は直ちに家臣3人を派遣し、内1人が一昨夜帰国して詳報を得た。「実薩ハ平昔之議論之如ク、不辱吾国体、最感服之至、(○中

略) 因其所嗚乎薩哉々々，於僕無間然存候，足下如何，長之暴とハ天地之相違也」と述べている。(1)「関東如何之光景や，不可解」とし，閣老も外圧について気付かぬはずはないだろうと言う。(2)長州藩使者の来藩についての返答の内容の件。(3)都合により「側之者」を鹿児島へ派遣する積りである。薩英戦争の見舞い，「且猶亦一藩中之議論 皇国已来之定見等」に関する意見交換が目的であり，宗城も承知してもらいたい。以上を見ると，一旦瓦解した公武合体派が，春嶽・容堂・宗城・久光を主軸に公論の形成を始めているとあってよい。

8月10日，宇和島藩も今泉市太夫（文武世話方，慶応元年近習役・鉄砲頭，184石2斗）・高間誠一郎（鉄砲頭高間権八の弟か，権八は307石）を長州へ，桧垣弥三郎（威遠流砲術指南方同助三郎の子，245石6斗），林基吉郎を鹿児島に派遣し，斎藤丈蔵が九州から帰っている¹⁶⁾12日，これまで禁制としてきた猟師以外の農商民の鉄砲取り扱いを許可し，銃128挺を渡し，その鉄砲取扱者は代官が管理した。

8月13日，大洲藩士吉田新兵衛，芳我轍が来藩して清水真一に面会し，家老松根図書・桑折駿河宛に宗城上京の祝賀と親交の意を伝えている¹⁷⁾28日，京都から中井族之助（5人分，中井筑後の子，文久3年11月小姓頭，元治元年正月持筒頭，2月家督500石相続）が京都から帰り，翌29日，今泉市太夫・松本司書（172石8斗，松本源五兵衛の子，小姓・文武世話方）が長州から帰っている¹⁸⁾こうして，宇和島藩自身の情報収集も進んだ。とくに，中井は八月十八日の政変に関する詳報をもたらしたであろう。この公武合体派（薩摩・会津中心）により，尊攘派の拠点となっていた国事参政・寄人，親兵は廃され，大和行幸なども中止され，三条実美らは長州へ走った。

外交問題の概要

開港以後の国内政局の動向，公武合体派と尊攘派の対抗は，貿易の開始による物価騰貴，生活不安の問題と深くかかわっていた¹⁹⁾通商条約の発効によって，横浜・箱館・長崎の3港は開港場となり，安政6年12月9日に新潟，文久2年11月12日に兵庫の西港が開港され，文久元年12月2日に江戸，さらに大坂がそれぞれ開市されるはずであった。し

かし、万延元年には早くも新潟・兵庫の両港、江戸、大坂両都の開港開市延期が外交問題となり、翌文久元年には幕府が開港開市の延期を各国に求めるという事態になっていた。とくに近庫開港・大坂開市には朝廷が強く難色を示した。

桜田門外の変後の久世・安藤幕閣は「公武一和」のため和宮降嫁を求めたが、それには孝明天皇の「蛮夷拒絶」を条件としていて、これが朝廷・諸藩の尊攘派を台頭させた。各国との交渉は曲折を経て、文久元年12月21日、幕府は外国との直接交渉のため、正使竹内保徳らの使節団を派遣した。そして、とくに翌2年5月5日、イギリスとの間に「ロンドン覚書」が調印された。その要点は開港開市の5年間(1867年末まで)延期と、その代償として減税と条約の厳守、対馬の開港、貿易の促進が求められた。イギリスに準じて仏・蘭・露の各国も同様に調印した。英国公使オールコックの対日外交の基本は市場の拡大にあり、両港両都の開市の強行は日本の内政を混乱させると考えた。

文久2年、朝幕関係は一変し、島津久光の勅使大原重徳を擁する勅旨による政治改革、長州藩世子毛利定広による安政大獄以来の国事犯の宥免等に関する勅旨の伝達、同藩主毛利慶親による条約破棄等の要求、これらに押されて幕府は一連の改革を行った。土佐藩主山内豊範は三条・姉小路の勅使とともに江戸に行き、攘夷督促・親兵設置の勅旨を伝えた。これらの事件は明らかに幕権の失墜を示すものであり、加えて、同年8月21日には生麦事件が発生した。同時に御殿山英国公使館の焼き討ちは、イギリスを始め諸外国にとって脅威的な事件であり、横浜鎖港の勅令は和親・貿易関係まで破壊するものであった。とくにイギリス代理公使ニールは、その強力な海軍力により反幕的な尊攘派諸藩を抑圧することを考えた。攘夷・鎖港問題は内政と表裏の関係にあった。当時の英仏両国は幕府援助の立場をとり、文久3年6月の小笠原長行の率兵上京、京都制圧策の失敗は、とくに英国が親幕的立場を放棄するきっかけをつくる。

文久3年5月10日を期しての長州藩の攘夷の実行、7月の薩英戦争は、こうした内政指導力を喪失している幕府から、攘夷論を捨て英国接近に転換した薩長両藩、とくに薩摩藩にイギリスは対日貿易拡大の路線を見出させることに

なった。長崎貿易、さらに横浜貿易の衰退、下関海峡の封鎖は対日貿易を危機に追い込み、その打開策は幕府よりも、対抗者であった薩長両藩の攘夷論の止揚にあった。

参預会議

文久3年(1863)8月、京都留守居役(小梁川主膳)に宗城上京の勅書が届いた²⁰⁾当然、島津久光・細川良之助(護美)等の上京を求め、朝廷は「天機為御守衛人数召連」と、率兵上京を求めている。9月4日、久世通猷(前参議、公武合体派)から8月23日付宗城宛返翰が届いた²¹⁾その別紙に、「時勢追々切迫、如命千古無比危殆之由」と、宗城が帰国後の情報提供を求めたことへの返信であった。また、八月十八日の政変によって三条実美ら7人の公卿の官位停止、攘夷親征の中止、長州藩はじめ尊攘派の一掃に関する達書が届いた。勅書が宇和島に届いたのは9月5日である。

翌6日には、早くも勅旨の趣旨が藩士に伝達された。徳川慶勝・鍋島閑叟・山内容堂・島津忠義・松平春嶽ら多数の藩へも上京の沙汰があった。8日、宗城は藩士西園寺雪江(松田覚助の子、源八郎弟、小松藩儒近藤勇之介門弟、物産学も修行、兄の順養子となる。安政5年6月17日、家督307石を相続、宗城付、文久元年7月27日、本姓西園寺に復し、同3年8月2日近習役・目付見習、元治元年9月7日、目付本役・軍使兼帯となる。実名公成)を土佐藩に派遣した²²⁾雪江は容堂側役の寺村左膳・乾退助の「西園寺へ御渡ノ御自書」および「容堂答書」を持って帰国した。

前者では、両藩の従来の「格外隣交」および「近来ハ弥御別懇」という両敬の関係を強調し、容堂には「当時不及出京旨仰出」されたが、やがて上京するという。そして、(1)「皇国此末如何可相成著限ニ候や承度」と、宗城の政局観を求め、(2)徳川慶勝の立論、(3)「水戸藩士十七日変動之処置」、(4)京都の情勢、御所内に両端説ありというが、どう両端に分裂しているのか、(5)在京浪士の動静、(6)三条ら長州落ちの人々の帰洛の件、勅使の件とも、(7)長州の情勢、藩主父子の不和や藩中騒動を土佐から九州見聞の人物が目撃しているというが、その形勢を聞きたく、事後の処置をどう推察しているか、(8)堂上方が両党に分裂

しているのではないか、そうならば両派の姓名を聞きたい、(9)「当時両役国事掛名元」を聞きたい、(10)中川宮に朝廷指揮の権威があるのか、堂上の誰にあるのか、以上10点について宗城に情報を求めている。容堂は「痛所大ニ発動」して病臥し、雪江には会わなかった。

「西園寺手扣土州御答」には、(1)土佐・宇和島両藩の隣好、(2)去月、伝奏よりの達によれば、土佐藩は攘夷問題について建白したが、重ねて採用の有無を伺っている。それまでは「無害心往来之異船」を打ち払うことはない。宗城の意見のように「人気為鎮定権宜第一策ニも可有之哉」との風聞もあるという。(3)容堂は病氣全快次第上京する手順になっている。(4)その上京が「何故此沙汰止ニ候哉」、大体推察できるが、確実になれば直書を送る。(5)「京都去月極日後之様子」、「御所内両端之説」については聞いていない。(6)「両役国事掛」の件、「参政国事掛寄人」等は廃官になっている。(7)中川宮は専ら朝政を指揮し、毎日参内と聞いている。(8)三条実美らの長州における動静は不明だが、帰洛することはない。(9)「尾州老公立論」「水戸十七日変動」についての情報は聞いていない。(10)在京の浪士の勢力は弱く、「巨魁之者」は長州・大和(8月17日天誅組の変、27日攘滅)の方に烏合している。(11)長州藩の内情は「惣而不承」、(12)「皇国此未如何可相成云々」、この点は「如何共難申述」、しかし昨年来のように尊攘派が台頭しては、1年内に「不可云之大患ニ至リ可申」、もっとも八月十八日の政変以来「天下反正之御形ニ付」、この機会を失わず、幕府は朝廷を遵奉する英断の教令を迅速に列藩に示し、諸外国に対しては「彼此曲直を御正被成候時ハ、御国体一新に可相成哉」と、情勢の展望を示す。(13)「関東之様子云々」、「長州之暴儀も畢竟関東之御因循ニ依而之事と御寛宥之御沙汰とも相聞候」、まず横浜鎖港、ついで長崎・箱館も拒絶という風聞もある。以上によって、容堂と宗城は第二回目の上京を前にして、とくに八月十八日の政変後の情勢分析に関する意見の交換を細かく行っていることが分かる。なお、雪江の宇和島出発は9月8日、10日夜中村着、12日中村出発、15日夕高知着、16日に御内使者の役目を果たし(土佐側の御使者受片岡茂右衛門、容堂の側用人兼目付尾崎要に会う)、

21日高知出発し、25日に帰着している。

9月15日、宗城は鳥取藩主池田慶徳に書翰を送った²³⁾。宗城は八月十八日の政変時の京都の騒擾について触れ、鳥取藩らの警衛によって鎮静に至ったこと、さらにその後の情勢については、「一体此度之発起何故と申事、更に外面ハ不相分候」としながら、大和行幸の詔勅問題から「変機実ニ切迫」し、そこで急に中川宮らの英断によって政変に至ったと考えている。今後の処置について意見を聞き、宗城に上京の勅命が一旦ありながら、藩主宗徳に率兵上京の旨、近衛家から通達替になったのでよろしく指揮を頼むという。宗徳・宗城両者の上京では宇和島は「無人境」となり、昨年上京の時の状況では「家来共不安心申出、承服仕間敷、進退当惑故」と、藩内事情を伝えている。

9月16日、桧垣弥三郎、林基吉郎が薩摩から帰国し、島津久光の8月5日付答書を伝えた²⁴⁾。久光は「皇京以来如接尊顔大輸快之御確論致承知、(○中略)如高論公武之形絶言語候次第」と述べ、桧垣・林が宗城の書翰を鹿児島へ持参し、宗城は政局観を久光に伝えたことが分かる。久光は「馬関一条」を宗城同様に「笑止之事ニ御坐候」とし、薩英戦争については、6月27日英軍艦が城下近海に来船し、「神奈川一条」(生麦事件)について(幕府は5月9日賠償金11万ポンド支払済み)、威圧を加えた。薩摩藩は「開論(○示談)之所存ニ而」再三応接したが、7月2日蒸気船3艘を奪取されたため砲撃し(この時、五代才助と松木弘安がみずから捕虜となった)、「終日戦争之处」、翌3日に退帆したと簡潔に伝えている。この事実は、すでに宗城も承知のことであったし、宇和島・吉田両藩領の庄屋にまで薩摩藩側の奪戦ぶりが伝えられている²⁵⁾。薩摩藩側の被害も大であったが、久光は「乍去先敗ニ不至」と述べている。薩摩藩と宇和島藩との上方における折衝は小松帯刀が行っているという。開国論を藩論とした薩摩藩は、薩英戦争によって攘夷を実行したと諸藩に認識され、政治的指導力は強化された。土佐藩でも前藩主山内容堂の指導力が回復し、すくなくとも、薩土宇三藩の公武合体論の再結集がみられた。一方、長州藩の下関における敗退と八月十八日の政変により、長州藩を主軸とする尊攘派の勢力は打撃をうけ

た。

このころ、宗城は老中水野忠精・板倉勝静宛に書翰を出している²⁶⁾ 将軍家茂が大坂から蒸気船で帰府したことを英断、「実以無此上御同意，恭賀之至」とした。その後、山内容堂・豊範父子の建白を宗城は支持し、採用して欲しいという。八月十八日の政変は、尊攘派に対して、中川宮ら（前関白近衛輔熙・左大臣近衛忠房・右大臣二条^{なりゆき}齊敬・内大臣徳大寺公純）と薩摩・会津・土佐藩らが協力したもので、これを宗城は英断とし、「即今^(こそ) 社 公武真之御合躰ニ可被為成」好機と説いている。また、宇和島藩は幕府から赤羽根橋守備を命ぜられ、朝廷からは宗徳が京都守衛のため上京を命ぜられ、宇和島の防衛もあり、「三方之守備，逆も不能藩力，依而其他へ残置候家僕共早々帰邑為仕度故」と、赤羽根橋守備のための藩兵の増加派遣を辞退している。宗城は「容堂申合，水火ニ投候とも，乍不及御為抛身命報恩可仕覚ニ而」と、公武合体についての土宇同盟論を述べ、「何れ上京ハ仕候様可相成，其時容堂始申合」，朝幕のため粉骨碎身する。その公武合体論は「容堂僕ハ別而因循，且関東（○幕府）方と相許」と翼幕の立場を明言している。さらに宗城は一橋慶喜の立場にも触れ，外交問題についての詳報を求め，「後日上京之時心得方基礎相立」てたいとしている。

9月17日，近衛家（忠熙・忠房連名）から宗徳の上京は宥免し途中から帰国してよい，代わって宗城に上京が命ぜられた²⁷⁾ 宗城は23日波止浜に船を出し，中川宮・近衛公・容堂・久光と連絡をとりながら着々と準備を進めた。

「中川宮への御呈書」には²⁸⁾ 「定而容堂三郎（○久光）良之助（○護美）等同様被為 召候半とハ奉恐察候，宗城一人上京仕候而ハ，毫も御為筋相成可申事ニ無御坐，（○中略）何卒三人落合申談」と伝え，容堂は持病のため上京猶予を願っていたが，その後朝命がなく，宗城と容堂の上京についての取り扱いに相異があると疑惑を糺し，容堂上京の命を求めている。「土佐老侯へ御呈書抜要」によると，「小南（○五郎右衛門）武市（○半平太）始同志之數輩」を抑え，藩論を一定して上京するよう求めている。

10月2日，宗城は上田一学（虎之間順列，4人分20俵），浅野登（浅野藤左

衛門嫡子、安政3年6月熊本へ遊術修行、3人分)に中国筋への「出浮」をいったん命じたが、5日に中止している²⁹⁾4日、隣藩大洲藩は「今日、勢ナレバ別テ御親厚遊サレ、御同論ナレバ御互ニ事ヲ御通シ合遊サレ度ト」、先に加藤侯の懇望もあり、清水飛驒が応待した。この日さらに物頭吉田新兵衛が御内使者として来藩し、宗城は城下郊外の馬串の桜田大炊別荘で新兵衛に会った³⁰⁾吉田は宗城上京の情報を得て、「何卒以来者諸事無御伏臆被仰通被下度」と挨拶している。9日、三浦静馬(文久元年6月、目付軍使兼帯、父安房は300石)が大洲に派遣され、使者派遣の礼を述べ、「向後御互ニ御示談申度」と返礼し、両藩の隣交関係は確立された³¹⁾

10月5日、9月25日付の宗城宛近衛忠熙書翰が届いた³²⁾「当地形勢先々静謐ニハ候得共、未人心不一致、甚以心配之候ニ候」と伝え、上京後詳談するとし、義三郎(宗城4男、中津藩主奥平昌服養子、昌邁)、良之助、筑前(黒田長溥世子長知、公武合体派)が間もなく上京と伝えている。10日、容堂から6日付の返書が届いた³³⁾西園寺雪江派遣の礼を述べ、容堂の上京について、宗城が中川宮・近衛家・久光に呈書または問い合わせした件について、「是ハイラヌ御配意奉存候、御呈書写奉拝閱候、長面(○宗城)ニシテ兼長舌者、可悪々々」と宗城の心配を不要としている。容堂は兵之助(山内豊積、山内分家当主)の帰国次第上京する、薩摩の高崎猪太郎も使者として来たという。容堂は「昨年以來暴論之徒」の処置は漸次決定したことから、宗城は新たに公武合体論を構築しているが、容堂はその先の難問を看破して「上京御断之口実ニ仕候、(○中略)足下爾来之明眼、何以如此暗ク成候や、不可解トハ此事也」と批判する。京都の風評に「土宇合して大洲ヲ攻候云々」があり、「芋(○薩摩藩)ハ九州ヲ并呑之氣有リ」、「鯉(○土佐藩)ハ四州ヲ并呑之氣味有リ」という情報を伝え、「足下も御油断被成間敷」と自重を促している。11日に9月28日の近衛忠熙の返書が届いた³⁴⁾容堂の上京を中川宮が見合わせよと言ったことは、宮も後悔している、早く上京するよう催促していると伝えている。

10月13日、久光から10月5日付返翰が届いた³⁵⁾公武周旋のため13日に上

京するので、宗城にも上京を求めている。別紙に(1)「炮台其他戦地之形勢」は藤井良蔵に聞いて欲しい。(2)「弊藩当時之国論」,「皇国已来成行定見」の2件は「朝変暮革」の時世だから、今は何とも言えない。(3)「公武方今云々」,これも上京しないと見透しがつかない。(4)「中川宮」,「常御所床下云々」は良蔵から詳述させる。余は上京の上、直接開陳する。幕閣・朝廷・諸大名間にはそれぞれ見解の対立を含みながら上京することになる。

10月17日、宗城は下路通行(大洲・松山両藩内通過、波止浜より尾之道は藩船使用)で上京することになった。この時の藩兵の編成・装備等については明らかでない。戒厳状態であったことは、「御供ノ心得」に、「非常之節ハ手太鼓急ニ為打候ニ付」,「非番之面々も御行列余計不相離、前後之内江罷越、御警衛心掛可申事」との文言によって分かる。御供頭取は桑折駿河、御供兼京地守衛戦士隊長小梁川主膳、上士・中士の計は医師・坊主・料理方を加えて116人、馬9匹・足軽100人となっている。これに陣夫役として動員された村夫を加えると、300人は十分越えているであろう。しかし、上・中・下士計200人では軍事的には弱体である。従者の中には、松田源五左衛門・水野深右衛門・上甲貞一・井関十左衛門・井関齋右衛門(もりとめ盛良)・清水飛驒らの名が見える。翌18日、大洲で藩主加藤泰祉と対話、家老2人に謁見を許した。土佐・宇和島両藩は、大洲藩尊攘派に気がつかっていたと見られる(この間、27日に吉見長左衛門が伊能下野と改名した)。30日大坂に着、鍋島閑叟よりの返書に接した³⁶⁾「朝命幕令之義御尋被下、然処八月末不用幕命云々御達御坐候処、同晦日伝奏衆と尚番年之訳を以、濃州方江^(かれ)渠と兵端を起候節ハ、無論猥ニ打払無之様被相達、僕方へ相廻申、其後僕方へ者長崎表之義、関東と拒絕之御達相成候上掃攘可然旨」と伝奏衆から伝達があったという。つまり、攘夷について朝廷と幕府の間に見解の不一致があり、閑叟は「如諭疑惑之事件而已不少」と、早くも二回目の上京後の朝幕間の調停の難しさが伝えられている。

2日伏見着。島津久光の使者高崎佐太郎(正風)が八月十八日の政変後の京都情勢を伝えた³⁷⁾大和行幸には孝明天皇も尹宮(朝彦親王)も反対であったが、

三条実美ら「暴論ノ諸卿」が強奏し、「陰ニハ征幕ノ密策ナリキ」と実情を告げた。高崎の必死の周旋によって、朝彦親王は決断し、会津藩（秋月悌二郎）と薩摩藩との協同をはかり、前関白近衛忠熙に強奏して、政変を強行するに至ったと詳述した。

11月3日午後着京、本陣は大雲院であった。松平春嶽より来翰あり、尹宮・近衛家が宗城の着京を待ち受け、一橋慶喜も着坂したと告げた。春嶽の本陣は東本願寺学林であり、「右薩麟（○久光と勝麟太郎）之大意ハ、第一橋を始、閣下（○宗城）容堂三郎（○久光）并小子等会集議論之上、為 皇国尽力、規則相立、第一公武之親和等之事ニ御ざ候」と、二度目の上京の狙いが明瞭に示されている。薩摩の高崎猪太郎（友愛）も使者として来て、福岡藩家老黒田山城が昨日久光方に来て、「近頃ハ三藩と唱候薩長不和ニ相成候処、此御^時脱^か合何卒御一和ニ相成度事」と述べたので、猪太郎は長州に限らず各藩一和が「皇国」のためになるが、「長州ニ而兎角抱不平候様存候」と言ったという。山城は三条らの「早々帰洛」を求めたが、久光は三条らが帰洛の命を拒否しているのであり、「諸大名も相揃候ハ」相談するといった³⁸⁾同夕、安達清一郎（清風、鳥取藩京都留守居役）が来て、同藩には尊攘派と守旧派の対立があり、尊攘派が側用人らの重臣を殺害して攘夷に賛同し、藩主慶徳は政変後、政局に失望して帰国したことを告げた。

すでに、島津久光は10月3日、1万5,000（7,000とも）の大兵力を率いて上京、公武合体路線をとって將軍家茂・一橋慶喜の上京を働きかけるため大久保利通が江戸に行った。さらに久光の催促により松平容保も仲介して松平春嶽も13日に上京し、久光に協力することになった。容堂は12月27日、兵1,500を率いて上京した。慶喜は11月26日に着京していた。12月23日には、関白鷹司輔熙が辞任、二条^{なりゆき}齊敬に交代し、久光・春嶽・容保・容堂・宗城ら公武合体派が政局を動かす体制ができた。

11月6日、高崎猪太郎が宗城を訪ね、久光から相談のあった三条ら帰洛の件について話した³⁹⁾宗城は黒田山城の提案は長州藩の依頼によると推察し、帰洛

の際には長州藩士や浪士が随従するのではないかと言った。高崎は昨日土肥両藩と協議したが、肥前は不同意、諸侯上洛の上、公武合体の大基本が確立して後のこととし、黒田は2、3人を長州へ派遣して長州藩の近況を探り、周旋している時だから、黒田に一任することで同意している。

11月7日付春嶽書状でも⁴⁰⁾高崎に福岡藩の意見を聞き、「薩論同意之段申聞」、同時に將軍家茂も上洛を決定したと伝えた。9日、宗城は参内、小御所で孝明天皇に拝謁し、飛鳥井伝奏から「禁中御番」を命ぜられた。この番は諸大名を1～6番まで3人ずつ配当して宿直するもので、宗城は六番、長岡澄之助(細川護久)、同良之助(護美)と相役で、月3～5回の割り当てとなった。この日、宗城は高崎猪太郎を呼び、將軍上洛には水戸藩の反対もあるが、公武合体の「着眼ノ大綱細目を筆記シ教示ニ預リタシ」と言った。また黒川嘉兵衛(幕府目付、一橋家人)も来て、「幕府ニ於テハ閣老始薩及 公等ヲ疑フコト甚シ、大樹公ノ御上洛モ困難ナリ」と、幕府の内情を話した⁴¹⁾つまり、宗城らの公武合体策には長州藩だけではなく、幕閣内にも反対論があった。

この頃、幕府は横浜鎖港問題を抱えていた。そのため、12月29日、外国奉行池田長発らが欧州へ出発し、この問題が内政問題をさらに複雑化させていた。宗城は、11月12日、10日付でこの問題を藩内に伝達し、攘夷は幕府の指揮によるので、「輕拳暴発之輩無之様」と戒めている⁴²⁾列国の下関攻撃の準備も整いつつあった。

11月15日、安達清一郎が来て、昨日長州藩の佐久間佐兵衛(忠亮・義濟、大坂藩邸留守居兼蔵元役)に会い、近く家老1人が上坂して謝罪の歎願書を持参したが、「依然抗触ノ廉」があったという⁴³⁾この件は高崎佐太郎を経て久光に伝えられている。会津藩は警戒体制を強めた。

11月17日、尹宮から春嶽も来ているから相談に出よとの連絡があり、宗城は騎馬で急いだ⁴⁴⁾相談の内容は(1)尹宮の住居の筑地を拡張し仙洞御所へ渡廊下を撤去して建て継ぎする件、(2)勸修寺宮の件、(3)長州処置七卿の件、尾州老侯(慶勝)出京の件、(4)一橋と会津(容保)の件、(5)会津増封の件であった。こ

の日、容保より答書が来て、宗城の上京を喜び、交誼を求め、「御挽回之機」の至ることを望んでいる。

19日、春嶽から江戸城大火の報が届いた⁴⁵⁾これは将軍の上洛問題にも関係し、幕閣はこれを理由として上洛の延期も懸念された。春嶽・宗城・容保・久光、永井尚志・京都所司代稲葉正邦らが集会し、永井を順動丸で出府させることにした。この時、宗城は久光から鷹司閑白の依願免職、二条斉敬が就任の話を知っている。翌日、永井には越前・薩摩・肥後・会津・筑前・宇和島の各藩からも1人宛の使者が同乗することになり、宇和島藩は井関斎右衛門に出府を命じた。この日、容保は宗城に呈書し、公武合体は大政を幕府に委任し、国家にかかわる事件のみ朝廷に奏上し、「諸侯伯」は幕府の指揮下に置かれるべきこと、勅命による諸大名の上京も、幕命によってなされるべきこと、将軍が上洛して「大綱之御規模御決定相成候ハ」江戸に帰還し滞京しないことなどの原則を伝えている。しかし、上京中ないし上京予定の諸藩の論調は複雑であり、尹宮や近衛公が諸大名を集めて評決できるような状況にはなかった。宗城は諸大名の上京・滞留時の混雑、「費用も不少儀」、つまり諸藩の財政難を挙げて、無理に上京させる必要はないと考え、春嶽もこれに同調していた。11月22日は宗城宛近衛忠熙(翠山)書翰には⁴⁶⁾「扱諸藩被召候一条御勘考之処、少々御懸念も有之候趣、尚又春岳三郎へも御談合之上、密ニ御申聞之趣、夫迄朝議御評決御見合之事、何も承候」と納得している。

11月24日、春嶽・宗城ら7人の大名が参内(容保・長岡兄弟ら10人不参)、紫宸殿から孝明天皇の出御を遥拝した。25日、安達清一郎が宗城を訪ね、先述の佐久間佐兵衛に続く長州藩士^(ママ)庵原(伊原、長州藩家老)主計が藩主父子自筆の口上書を持参して謝罪したという⁴⁷⁾(井原は久坂玄瑞・入江九一らを連れ、入京を乞うたが許されなかった)。その主意は八月十八日の政変のため、宮廷御門守衛を免ぜられ、止むなく七卿落の暴挙に及んだのは、「尊攘ノ行違ヨリ生ジ」たことである。現在長州藩には三説があり、「一二曰ク、公武ニ謝罪ス、二ニ曰ク、是非曲直ヲ正ス、三ニ曰ク、暴論ヲ自守ス」であり、三の意見が主流であ

るというにあった。この暴論の鎮撫のため再度出願したというのである。同日春嶽より来翰あり、会津藩士秋月悌次郎が来て、將軍は上洛のため、12月15日乗船との情報をもたらした。

27日、春嶽より来翰⁴⁸⁾ さらにその家臣毛受鹿之助が来て、春嶽と慶喜・容保らの集会の模様を伝えた。春嶽は慶喜を高く評価し、「第一当境之事情及縷陳候、中々当夏以来 幕政之儀ニ付一橋尽力、実ニ感服之次第、(○中略)橋公ナクンバ実ニ 幕廷危殆之仕合、先々橋之尽力ニテ、今日迄之都合出来申候、夫故剛情之念ハ消却之様子」と述べている。

28日、秋月悌次郎が来て、井原が勸修寺經理つねまさ(堂上公家、長州に接触し禁門の変後蟄居)に工作した件について、「長人爾後入京之口開ケ候而ハ、以の外義」と述べた。これを受けて宗城は尹宮に京都守護職の同席、井原らの入京阻止について意見を述べた。この日宗城は慶喜に会ったが、その話の中に「幕府、尹宮ヲ忌憎ノコト、幕威ヲ更張ノ含アルコト」という、宗城が周旋上もっとも注目していた話も出た。

12月に入ると、尹宮ら親王・公卿、雄藩大名らの交流はますます繁雑になっていった。一方、長州藩の動きも活発になっている。2日、福岡藩士黒田山城・浦上信濃が宗城に長州事情を伝えに来た⁴⁹⁾ 黒田が長州に行くと尊攘激派が毎夜来て徹夜し、「幕ヲ滅シ 王政ニ復スルノ心得ナリ」と論じた。すでに長州藩尊攘派からは討幕・王政復古の論義がなされていた。その発想からすれば、公武合体論は佐幕論の一種となり、雄藩大名は時流から浮き上がった存在となる。黒田らは当惑し、藩主父子・七卿との対面は遠慮した。八月十八日の政変後、家老益田右衛門介が帰国すると、「兩日間ニ又変換權威強加レリ」という状況になった。岩国藩主吉川監物つねまさ(經幹)の存在に触れると、宗城は「元來志宜シキ人物ナレバ、其跡ヲ以テ同罪ニ論ズベキ者ニ非ザルベシ」と言い、黒田も「陽ニハ暴徒ト同論ナレトモ、陰ニハ到底現況ニテハ本藩モ滅亡ノ外ナシ」と長州藩主に直諫したが採用されなかったと伝えている。また、黒田は昨日高崎猪太郎が来て、筑前藩の者が「薩摩ハ開國論ナリ」と言ったといい、その出所を追

求した。黒田は周旋方までもそのような説を吐露した者はいないと言うと、高崎は「爾後薩ハ開国論ニ非スト一藩ニ示サレ度ト」求め、黒田は薩筑離間の策と考え、宗城に支持を求めた。薩英戦争後、従来から開国論をとっていた薩摩藩は急速にイギリスに接近し、イギリスも対日政策を転換して、薩摩中心の内政改革を支持するようになっていた。高崎はここに発する風評を否定することにより、公武合体論の調整を考えたのであろう。宗城の許には春嶽の使者毛受鹿之助ら、安芸藩探偵からの情報として黒田山城と同じ情報が届いた。

12月4日、秋月悌次郎が来て、11月16日に永井尚志が將軍に謁し、12月18、19日に解纜し上京に決定したと伝えた⁵⁰⁾ 11月26日付永井書翰には、大坂出港、在府中における幕閣と交渉、上洛の決定に至る経過を評報した上、「今一端ハ今般 御上洛被為成候ハ> 公武御一和論より攘夷は御沙汰止ニ而、開国論ニ可相成と之儀ニ而、盛ニ異論を申唱候」という幕閣内の模様を伝え、永井は「攘夷之 叡慮ハ断然御動無之ハ申迄ニ不及」と返答し、「一日も早く 御上京被為成候様之外他念無之候」と結論している。京都では、「尹宮へ窃ニ 天位ヲ奪フノ姦計アリ」との張紙をした者があって紛糾し、外国軍艦の長州攻撃の風評も伝えられ、安定した政局ではなかった。12月に入り、諸公卿・諸大名の会合はいっそう頻繁となり、將軍上洛を前にして、朝廷への上書、閣老への連署書が作成されて、意見の調整が進められた。上表は12月7日、慶喜・慶永・容保・宗城ら9人の連名で⁵¹⁾ 尹宮に関する浮説、また嫌疑を否定し、公武合体運動の中心人物である朝彦親王を擁護して、「皇国之綱紀御挽回」を期すものであった。その文言中に慶喜らは「臣等」との語を用いている。

12月12日、高崎猪太郎が来て⁵²⁾ (1)勸修寺宮と長州の親密の件(否定)、(2)將軍は大坂城に在城する件、(3)開港は輿論一定せず考量を要する件、(4)長州より申出の藩主父子の内、上京願の件について相談している。10月27日、長門宰相名で出されていた井原主計の弁解書が施薬院で討議された。長州藩は八月十八日の政変以後の堺町御門警備の解除について異議を表明し、騷擾に至ることを避けて帰国し、七卿は「其節之次第不穩事と而已奉存」、攘夷の先鋒となるため

同行したという。一同の評決は、「一先帰国御差図ヲ待ベシ」との答えであった。17日、宗城は初めて勧修寺宮に会い時勢を論じた⁵³⁾ 勧修寺宮は公武合体の上での攘夷を主張し、同行した高崎猪太郎・同佐太郎は「方今攘夷ハ出来難キ理由ヲ申上ケ」、これを認め、「尹宮近衛公等ハ 天朝ノ為粉骨尽力アリ 公等ハ幕府ヘ心ヲ添、輔翼セラルベシ、何分此勢トナレバ、諸侯モ 朝廷ノ御評議ニ連リ 官武一致ノ基本ヲ建度」と述べ、意見は宗城と一致した。

12月20日、中根雪江が宗城旅館に来て、島津久光の官位昇進の件について意見を求めた⁵⁴⁾ また、春嶽は「勧修寺一件」（朝彦親王の兄元勧修寺濟範法親王、元治元年正月9日還俗、山階宮晃親王となる）について相談した。21日、久光は従四位下少将に任官させることが決められ、朝彦親王を軸とし、慶喜・春嶽・宗城の推進する公武合体が実現する条件が形成された。22日、若年寄中井筑後の子族之助（宗城小姓）が八月十八日の政変時の精励を賞されて金700疋を与えられていることを見れば、宇和島藩も弱体ながら会津・薩摩に協力していたことが分かる。

12月22日、宗城は久光旅館で「朝廷参謀ノ件」は近衛公に聞いたが、無位無官では昇殿に支障を来たすという久光の考えを聞き、春嶽・容保・容堂・宗城に限って知らせ、一橋慶喜に申し入れたと久光から聞かされた。25日、春嶽らから將軍は当分滞坂、朝議参謀はよくないので、朝議加談としてはどうかと久光と合意したことを聞いた。28日には容堂着京と伝えられた。朝議参謀・朝議加談の構想は久光から出、公卿たちは朝廷内への諸大名の介入について警戒するところがあった。高崎猪太郎は宗城に、「朝議参謀ハ六ヶ敷、此儀不整バ迎モ御挽回ノ期無之ト、薩藩ハ申決シタレバ、此上ハ太平関白徳大寺等説得ノ含ナリ」と言っている。

文久4年正月元旦、12月晦日付で、野宮宰相中将（定功、武家伝奏）から、慶喜・春嶽・容保・宗城・容堂に、「不安易御時節ニ付、可有参預御沙汰候事」との通達があった⁵⁵⁾ 参預会議の成立である（久光は正月13日に任命）。2日には長州藩を「於幕府為誅戮打手可被差向事」と、これら諸大名は決定している。

参預会議は2日おきに朝廷に参内し、朝議に出席する制度をいう。天皇の面前で意見を述べて天皇の意思が決定されるもので、公武合体としながらも、雄藩大名が朝臣としての建前で国策を決定しようとするものである。権力は幕府から朝廷に移行し、これがやがて公議政体論に到達していく。しかし、現実には長州藩の尊王倒幕論、江戸の幕閣の幕府権力回復論があり、雄藩大名の参預会議は内部対立もあって、最初から難問を拘えていたのである。

正月3日、容堂は病気を理由に参預の辞表を提出しようとした。春嶽・久光は連名で宗城にこれを阻止するよう連絡した。宗城等は参預会議に出席のための参内で、濟範の還俗、久光の任官、容堂の辞任対策を協議した。6日將軍家茂が兵庫へ着船、9日参預一同が春嶽旅館に参集し、長州藩処置について、紀州藩主徳川茂承^{もちつぐ}を名代とし、副将松平容保・津藩主藤堂高猷^{たかゆき}、薩摩・加賀・肥後・因州・備前・小倉・中津・久留米・柳川の諸藩が加勢し、海軍を派遣することにした。土佐藩は武市半平太ら勤王党の投獄という問題を拘え、容堂はこれを機密として議論を統一したと宗城に話している。宗城が長州藩攻撃について話すと容堂は驚き、参預会議の議題とすることで意見が一致した。12日、宗城は容堂に会い、その参預辞任の撤回を確認している。宇和島藩は戦争の開始とともに兵糧米の不足を考慮し、大坂他の各地の負債金主に与えていた合力米の半数を借上とすることとし、大坂藩邸では49人扶持・米694俵を借上としている。

正月15日、將軍着京、久光・容堂・宗城は会合して、幕府への大政委任を確認して、長州処置については、「皇武ヨリ一応御不審ノ条御尋アリ、末家へも御垂諭、幕府ニテ規律更張、諸侯へ所存御尋アリ、彼ニ内乱ヲ醸スノ策ヲ施シ、七卿ヲ出国セシメ、益田久坂牧(○真木)和泉輩ヲ嚴科ニ処スベキ御達アリテ、其施行ノ順序ハ彼ノ挙動ニヨリ速ニ討手発行成度等」の協議をした⁵⁶⁾正月16日付春嶽書翰では、元幕府陸海軍總裁・徳島藩主蜂須賀斉裕(徳川家斉の子)を、「幕之方ハ矢張御政事諸事時々登城」している身分だから、参預ではないが考慮するよう相談している。翌17日付書翰では、慶喜の政治手腕を高く評価し、

「^(アニハカラシヤ)豈料第一橋公之英雄風，一生之知囊ヲ被為御振，万鈞之昇力を以神州之金甌を全セしむる端緒を開けり」と述べている。

22日，宗城・春嶽・久光は二条城で將軍に謁し，昨日の將軍への宸翰を読んだ⁵⁷⁾ 將軍からは毎日登城するよう命ぜられた。この間も將軍上洛について，尹宮は「殊ノ外大不平，猥ニ幕威ヲ振つハ尊奉ノ意ニ背ケリ」とし，しかも宗城の所為としたため紛糾した。また，容堂は25日付書翰で⁵⁸⁾ 春嶽・久光・宗城に，「於僕ハ因循閣老之応接ニ而，肺肝如裂」と述べているように，幕閣や蜂須賀斉裕らに対する強い反撥があった。28日，二条城での長州藩処置について，久光・宗城は同論であったが，容堂は將軍帰府の上処置を定めよと異論を唱えた。

2月朔日，山階宮から依頼の藩士貸与について，宗城は清水飛驒をもって，河原治左衛門ら3人を貸与するとした。翌2日，宗城は二条城の一橋御用部屋で，老中水野忠精から「勅諭ハ布告ニ決ス，横浜ハ鎖港，長崎・箱館ハ其俛ト朝廷ノ御命ナケレバ，天下人心承服致サズ，雜費料ハ七八十万両，長崎箱館ニテ渡ス筈ト主張 公等三侯ハ之ヲ長州処分ノ後トナシ，七八十万両ハ海防費ニ充テタシ」と⁵⁹⁾ 横浜鎖港問題が正式に長州処分問題にからめて出，幕閣との意見の対立が出た。

2月4日，春嶽から容保・久光・宗城宛の回状が来た（容堂へは慶喜より）⁶⁰⁾ 野宮宰相中將・坊城大納言から参預一同に伝達せよとの書翰であり，それに三条実美等の歎願書が添えられていた。その一通「臣等」には，「勅勘犯罪之身ヲ以」としながら，「攘夷之儀者外夷蛮之叛服ニ相響，内国脈之盛衰ニ相係候事故」と，將軍上洛を機として横浜鎖港・「外夷拒絶」の実行を求めている。もう一通は重ねてこれを主張し，「上京哀訴」ができないから建白するとしている。8日，高崎猪太郎より宗城に書状が届いた⁶¹⁾ まず，長州処分について，朝廷内の有罪論はさておき，「第一幕府失職因循之致所」と長州藩の攘夷の実行の責任を幕府に求め，「就而者長罪を尋問之ケ条者，十之者ハ五ニ，五ハ二ニ^(ママ)たし，無一言閉口為仕候様」処置せよ，つまり減罪せよという。高崎は「所謂小田原評定ニ不相成様」とするが，参預会議はまさにその通りに運営されており，「第一急速可

決事件者、彼七卿を差返候様との御事柄」とし、明日にも決断せよという。薩摩藩の姿勢に明らかな変化が生じ、それは幕閣との間に亀裂の生じてることを示している。宗城は久光に同調する。長州処分は会議によって、「尋問ケ条覚」5カ条にまとめられ、七卿落の責任、幕吏の暗殺、三条ら7人の召喚などに限定された。このころ、容堂は早くも帰国を洩らし、久光は宗城にその引き止め策を求めている。

2月11日、容堂・宗城・久光・春嶽は二条城で慶喜に建議した⁶²⁾ 将軍「御上洛爾後既ニ半月余之久敷、一事件も人且新破胆之御発令無之、御大政之末ニ関係之私共、甚不堪危懼之至」とし、幕政を改革し「上下離心」を防ぎ、後見職慶喜に「閣下御始善被成御輔弼、(○中略) 早く宇内之形勢洞見、乾断中興挽回之偉功」を奏上するよう求めている。ついで、紀伊中納言(徳川茂承)ら13人の西国大名に、長州攻撃の際の討手とその準備が命ぜられ、松平容保の京都守護職を免じて5万石を加増した。容保は陸軍総裁職に転じ、春嶽が守護職となり大蔵大輔を称することになった。

2月13日、宗城は容堂旅館で、「元三条卿始長州ニテ衣食^(ママ)ニテ不自由ニテ、此頃ノ使者モ漸ク出京ニ及ブハ天罰ナリ」と話している。14日、将軍参内、宸翰の請書が提出された⁶³⁾ その内容は、「膺懲妄挙仕間敷トノ 叡慮之趣ハ堅ク遵奉仕」というにあり、横浜鎖港は池田長発使節団の成功に待ち、沿海防備は嚴重にするというものである。長州処分は山形藩主秋元但馬守志朝^{ゆきとも}(長州藩世子毛利定宏の兄、幕長間を周旋)に説得させ、「悔悟」させたいというものであった。

2月16日、二条城一橋控所へ集合の節⁶⁴⁾ 参預会議の内証が表面化した。宗城は「且一橋卿ノ驕姿ハ其意ヲ得ズ」と感じ、久光も同感、密かに退出して一緒に尹宮邸に行き、意見を述べて明日の参内は断わると言った。そこに慶喜・春嶽も来て、「一橋卿醉言ヲ発サレ、宮ハ御閉口アリ」、横浜鎖港問題について、慶喜と久光・宗城らの開港派大名との間で明らかな見解の対立となった。翌17日、春嶽が宗城旅館に来て、慶喜は病氣と称して参内の約束を破り、春嶽は「一

橋卿ニテ此ノ如ク不勉勤ニテハ濟ザレバ」と言っている。「一橋之醉言，実ニ極一大閉口仕候」と春嶽は言う。この日，宇和島では足軽48人を雇い入れて新調組と称し，元締の支配で練兵させた。

18日，宗城は久光から「大坂辺防禦考案ノ図」を示された⁶⁵⁾砲台14，1カ所の建設費6万両，計約90万両，大砲810門(60ポンド砲，1門千両)，計80万両，その他城堡等の設備があり，膨大な経費となっている。これは，幕府財政から見ても机上の空論であろう。久光の考えは，開国論に反対する幕閣と慶喜に実行不可能な攘夷策を示すことによって対抗しようとしているのであろう。公武合体論は慶喜と幕閣を含む鎖国攘夷論・横浜鎖港論と参預らの雄藩大名の対立のなかで，もう解体寸前となった。

2月22日付春嶽の宗城宛書翰では⁶⁶⁾「一橋弥京阪守衛被 命ハ不日ニ有之候哉，又ハ手間取候哉相伺度候」とあり，このころには慶喜に後見職から禁裏守衛総督・摂海防禦指揮を朝廷が命ずる話が洩れている。また，もう春嶽は「僕昨日罷免之内願」を提出し，京都守護職辞任の許可について情報を求めている。「京兆之守護職ハ会ノ復職ナラハ，僕亦実ニ素意」と述べている。春嶽も慶喜に背を向けている。

23日，尹宮邸で長岡兄弟が建議した朝廷へ内献(天皇には米二千俵)を，幕府は実行せず，「薩南肥会等幕府ヲ見限りテハ，幕府孤立トナルベケレバ，(○中略)幕府孤立セバ 朝廷モ危シ等ノ御話アリ」，宗城はこれを認めている。「幕府ハ因循ナルモ長州征伐ハ覚悟スヘシ，結局暴ヲ好ム如クナリテ，次第ニ人心離散セバ致方ナシ」とされている。23日付春嶽書翰では，「容堂長兄(○細川護久)帰国之御暇賜リ」，28日に発足の様子だが，これは参預の諸侯には相談なく，慶喜「一己之決心」で決定され，「大不平大不愉快之極ニ候」と，その延期の周旋を宗城に求めている。

24日付春嶽書翰では⁶⁷⁾尹宮と中根鞆負との会談を伝え，「朝幕之間再一和破却ニ及んとの光景も相見え，不堪憤懣，憂苦之至候」と述懐し，さらに高崎猪太郎との話で，先日の慶喜の暴論以後の慶喜・閣老を全面的に批判している。

この日の参預会議で、長州問題について、長州侯末家一人（長府藩主毛利左京亮元周）・吉川監物家老1人を大坂に召喚することを朝廷から幕府に命ずることになった。25日には会津藩士手代木直右衛門が来て、26、7日頃に八月十八日の政変ほどの事件、つまり、二条関白の退職、慶喜の後見職退職、尹宮摂政任命と話し、宗城は幕府側の朝廷と幕府の離間策と考えている。26日付春嶽書翰では⁶⁸⁾大目付永井主水正尚志から登城の通達があったことについて、「幕府之因循を破り候ハ可為急務」としている。幕府の専断を制止し、「幕府 朝命遵奉ノコト」について、宗城らは在京諸侯に相談し、「軽重緩急ヲ取捨シ」、実行すべき分を抜書にして評決に付することになっている。

2月28日、容堂は離京、いよいよ参預会議は解体するに至った。27日、宗城は二条城で答書を出し、公武合体策について正論を述べた。その最後で、宸翰の持つ意義について触れ、將軍はその趣旨を開示し、諸藩はこれを受けて「銘々藩屏之任」に励み、とくに小藩は「立志発憤仕候ても不及国力義数々有之」ので、大坂等で「官」立の大小銃製造局を設置し、元価で売り渡し、外国から輸入の武器の世話、戦艦の拝借をさせて欲しいと述べている。この辺に、宗城の強兵策の本音がうかがわれる。このころ、尊攘派は頹勢を再建し、諸外国は下関攻撃の準備を進めていた。2月15、16日頃、四条柳馬場辺に張紙あり、久光（島津三郎）を、「天朝を奉軽蔑、下不構万民之困窮を、中川宮を手先にいたし、己か奸謀を逞条」、「表ハ夷人打払と申て内々交易致条」、「不忠之大名と同腹いたし、天下大乱の基を生ずる事」、「御国之御為を考候有志之者共駆逐する事」、「叛逆之事」の五条を罪状として挙げていた。「有志之者」はいうまでもなく、長州藩を中心とする尊攘派であった。

元治元年（1864）3月2日、小御所会議で、黒田下野守（長知、黒田長溥の養嗣子、津藩主藤堂高猷2男、長州藩支族および家老の京都招致を建白、公武合体派）が長州藩末家家老の悔悟のための上京について、再度参預に意見を求めた⁶⁹⁾。その返答は、長州藩が「此度ハ志士多人数召連ベク、就テハ諸藩ノ内ニ離間策ヲ入レ、又ハ曲直ヲ弁論スベシ、薩会人ト出合ハズ、互ニ怨怒アレハ軽

輩ハ殺撃モ醸スノ恐レアリ，一己ノ私争ヨリ終ニ騒動ニ及ブモ計リ難シ」と、2月24日の決定のように大坂に滞留させたいと、宗城は久光と相談の上返答した。慶喜は「先ツ御処置ノ寛猛ヲ決シ，寛ナレバ入京，猛ナレバ大坂然ル可シト，意外ノ説」を出した。尹宮の質疑に対し，宗城は「賞罰ノ漏ルハ宜カラズ，事ニヨレバ如此ノ御宥免ニテハ悔悟セズ忤論モ起ラム」と，慶喜の「寛猛ノ御処置」論に反対した。しかし，議論は紛転し決定に至らなかった。4日，前尾張藩主徳川慶勝が参預に任命された。長州藩使者の入京，寛猛の処置論が延々と続いた。春嶽も慶喜の態度を「軽蔑 朝廷，侮慢 幕府とも可申哉」と批判している⁷⁰⁾

参預会議が慶喜対久光・宗城らに分裂し，收拾のつかない状況に陥っている時，「蘭ノ軍艦七八隻長崎へ来リ，英ノリーニー船ノ来ルヲ待チ，長州ヲ襲撃スベシト，製鉄懸ノコンシュル欵ヨリ勝麟太郎ニ告グ」という情報も入っていた。6日，大久保一蔵が宗城旅館に来て，長州問題について，紀州・会津も態度を明確にせず，「主將此ノ如クニテハ勝利覚束ナシ，初メ利ヲ失ハ>彼ノ勢ヲ増シ，恐入次第ナリ」と述懐している⁷¹⁾。紀州を始め諸侯に長州攻撃の決意なく，一方，長崎からは「英蘭長攻」の飛報が宗城の許に届いていた。7日，久光は暇の願書を尹宮に出した。9日，宗城参内，「参預御断リヲ一橋卿ヨリ御相談アリ」，宗城は異存なしと返答し，ここに参預会議は解体した。朝暮間，参預の雄藩大名らの間を，宗城はかつて一橋派として動いた以上に熱心に周旋したといえる。しかし，小藩では，朝廷・幕府・慶喜・雄藩大名らを説得することは難しく，客観情勢もすでに参預会議では何の解決策も見出せなくなっていた。10日，藤井良節が来て，長州藩に「悔悟ノ模様ナシ」と伝えている。

3月12日付春嶽答書には⁷²⁾「近頃 廟堂之春色更ニ不分明，泉遠雅三閣老(○水野和泉守忠精・有馬遠江守道純・酒井雅楽守忠績)ハ依然ニテ，泉ハ不相替区々之心配有之候，唯々橋公之御方寸更ニ難解，(○中略)何分越薩宇和島之三藩を忌憚せられ，水因(水戸・鳥取両藩)等之入説盛ニ被行居可申ニ相違無之」との情報を伝えている。慶喜は参預会議の雄藩大名や幕閣とも異なる背景と方

策を求めているのである。しかし、同日、宗城は二条城で慶喜に会い、慶喜から横浜在留の英公使の主導する長州攻撃は延期の要望を聞き、長州藩尊攘激派を厳科に処すというのであれば攻撃も中止できるのではないかと、宗城は久光・長岡良之助との合議による返答をし、さらに横浜鎖港問題のあるなかで、両都両港の開市・開港は延期せよと言っている。

12日、福岡藩の長州藩への使者久野一角が長州情勢を伝えた。久野は2月18日長州着、側役山形半蔵・瀧弥太郎に会い、「公武ノ現況」を伝え、「悔悟謝罪」を求めた。家老益田右衛門介・福原越後・国司信濃も来たが、八月十八日の政変前の攘夷の勅旨を真実と考えているようであった。29日、長州公父子に会い、長州の概況を聞いた。(1)六卿は三田尻に居る、(2)山口に関門を設け砲台を置き、政務館に居住し、城郭化している、(3)益田等は「暴論徒」に制せられ、奇兵隊が「最暴」であり、公武からの圧迫があれば「暴発計り難シ」、(4)国司信濃は上坂するとの風説あり、(5)毛利敬親側近12人が非人の躰で諸国に探偵に出ている、というのである。この情報は、井関齋右衛門が春嶽に伝えた。

17日、宗城は久光とともに一橋旅館へ行き、参預を辞仕したのだから、大政参謀も辞仕したいと伝えた。この日、春嶽も京都守護職の辞任を申し出ている。一方、慶喜は朝廷から「禁裏御守衛総督、摂海防禦指揮等」を命ぜられ、後見職は解任された。慶喜は幕府高官から離れて、天皇直属の役職に就いたわけで、これ以後の慶喜は幕府機能を操作しながら、幕閣・雄藩大名よりも強力な権勢を持つことになった。在京諸侯は帰国することになる予定であり、久光・宗城らは「主上ヲ擁シ、天下ニ号令シ、大樹公(○將軍)帰宮ニ及ハ、鎖港ノ談判等ヲ避ケ、政府(○幕府)ヲ遁レ 禁闕ニ潜メバ安心故、水(○水戸藩)因等ノ入説ニテ関東へ嚴談シ」という「不臣ノ密策」と考え、外交・長州攻撃も専断することになるのではないかと考えた。4月7日、春嶽は京都守護職を辞任して松平容保が復帰し、同11日、京都所司代稲葉正邦に代わって、容保の弟桑名藩主松平定敬が就任した。京都に新しい政治権力が誕生したといえよう。兵権のないといわれた慶喜の背後には、徳川齊昭の子水戸藩主徳川慶篤、同じ

く鳥取藩主池田慶徳、同じく岡山藩主池田茂政という兄弟があった。宗城・久光・春嶽らは「橋公之所業実不可解」と申し合わせており、その就任に至る事情等も明確にはされていない。

3月24日、宗城の許に、長州諸隊の動きが急で、「宮市詰遊撃兵二千」が山口政事堂に押しかけ、その三分の一の兵力は藩主の制止も聞かず、「白鉢巻ニテ関声ヲ揚ゲ、三田尻ノ奇兵隊ニ入レリ」、その目的は六卿の復職と攘夷の実行を朝幕に迫るためという。⁷³⁾ 25日、宗城は慶喜に会い、「禁裡守衛惣督摂海防禦指揮ハ御願望ニヤ」と問うた。答えは然ラズ(老中有馬道純は宗城に、「専ら 橋公之胸中より出候事に而、更ニ更ニ閣老之談ニ而ハ無之候」と述べていた)、さらに宗城は「必ス御素願ナラム」と追求すると、「実ハ内願セリ、公武トモ因循ナレバ精力尽シテ勤ル心得ナリ」と本意を述べた。つまり、慶喜には幕府と諸大名を疎外しても権力を掌握する考えがあった。宗城が兵権はと聞くと、「漸次関東ヨリ来ルベシ、且守護職ノミアレバ兵権ハ不用ナリ」と答えた。宗城は「其実知ル可カラズ」と考えている。⁷⁴⁾ このことを宗城が老中水野忠精に告げると、驚いて「之ヲ承レバ杞憂ニ堪エズ、危険ナリ」と答えている。26日、高崎伊勢(左太郎、京都留守居役)が来て、22日に尹宮が摂海防禦総督等の事を密かに慶喜に洩らすと、慶喜は「両地(○京大坂)懇願ナリ」と答えたという。⁷⁵⁾ こう見ると、慶喜の権力掌握は、朝彦親王と慶喜の密約に基づくものと考えてよかろう。久光は「幕府大不平ニテ、全ク大樹公ノ権ヲ奪フナリ、(○中略)来月中旬迄ニハ一變動アルベケレバ進退ヲ決スベシ」と、高崎兵部(五六)をもって宗城に伝えている。⁷⁶⁾

長州問題について、久光はその決定までは諸大名の滞京を主張した。長岡良之助は「滞京セバ進退^(ママ) 谷ルベシ」と帰国を主張し、春嶽の同意を得たという。⁷⁷⁾ 30日、宗城らは帰国を出願することを申し合わせた。4月朔日、宗城は「一橋卿ノ方ハ断念スベシ」と絶縁を定めた。⁷⁸⁾ この間、井関斎右衛門が周旋役として動いている。4月7日、宗城は帰国の許可を得、10日、左近衛権少将に推任され、11日京都を出発、14日大坂を幕府の蒸気船黒竜丸で出港、15日に宇和島に

着き、松根図書等の出迎を受けた（京都留守居役は橋本郷右衛門）。

注

- 1) 「御重書目録」（伊達家文書）戊
- 2) 三好『宇和島藩における藩札の史料収集と研究』（日本銀行金融研究所『委託研究報告』No.1）35 ページ
- 3) 「公記」巻121 文久3年6月2日条
- 4) 同 6月7日条
- 5) 同 6月16日条
- 6) 同 6月17日条
- 7) 8) 同 6月28日条
- 9) 同 巻122 7月2日条
- 10) 同 7月12日条
- 11) 同 7月15日条
- 12) 同 7月20日条
- 13) 同 7月28日条
- 14) 同 8月2日条
- 15) 同 8月7日条
- 16) 同 8月10日条
- 17) 同 8月13日条
- 18) 同 8月28・29日条
- 19) この項、石井孝『増訂明治維新の国際的環境』参照
- 20) 『伊達宗城在京日記』205 ページ、以下『在京日記』と略す。
- 21) 「公記」巻122 文久3年9月4日条
- 22) 同 9月8日条
- 23) 同 9月15日条
- 24) 同 巻123 9月16日条
- 25) 吉田藩領小松村「赤松家文書」
- 26) 「公記」巻123 文久3年9月16日条
- 27) 同 9月17日条
- 28) 同 9月28日条
- 29) 同 10月2日条
- 30) 同 10月4日条
- 31) 大洲藩の動向の概要は、桜井久次郎編『大洲藩・新谷藩政編年史年表』（『大洲史談会文化叢書』1）参照

- 32) 「公記」巻123 文久3年10月5日条
33) 同 10月10日条
34) 同 10月11日条
35) 同 10月13日条
36) 同 10月晦日条 『伊達宗城在京日記』所収「文久三癸亥初冬依勅
令上京前後手留」参照。「藍山公記」の方が詳細である。
37) 「公記」巻123 文久3年11月2日条
38) 『在京日記』214ページ
39) 「公記」巻124 文久3年11月6日条
40) 同 11月7日条
41) 同 11月10日条
42) 同 11月12日条
43) 同 11月15日条
44) 同 11月17日条
45) 同 11月19日条
46) 同 11月22日条
47) 同 11月25日条
48) 同 11月27日条
49) 同 巻125 文久3年12月2日条
50) 同 12月4日条
51) 同 巻126 12月8日条
52) 同 12月12日条
53) 同 12月17日条
54) 同 12月20日条
55) 『在京日記』289ページ
56) 「公記」巻127 元治元年正月15日条
57) 同 正月22日条
58) 同 正月25日条
59) 同 巻128 2月2日条
60) 同 2月4日条
61) 同 2月7日条
62) 同 2月11日条
63) 同 2月14日条
64) 同 2月16日条
65) 同 2月18日条

- | | | |
|-------|-------|--------|
| 66) 同 | | 2月22日条 |
| 67) 同 | | 2月24日条 |
| 68) 同 | | 2月26日条 |
| 69) 同 | 卷 129 | 3月2日条 |
| 70) 同 | | 3月4日条 |
| 71) 同 | | 3月6日条 |
| 72) 同 | | 3月12日条 |
| 73) 同 | | 3月24日条 |
| 74) 同 | | 3月25日条 |
| 75) 同 | | 3月26日条 |
| 76) 同 | | 3月27日条 |
| 77) 同 | | 3月28日条 |
| 78) 同 | 卷 130 | 4月朔日条 |